

応用精神分析と反哲学

立木 康介(京都大学)

「精神医学と哲学」というテーマは、この二つの学問領域と精神分析の関係をあらためて問い直すよい機会かもしれない。

精神分析は両者のどちらにも属さないが、それぞれと浅からぬ関係をもつ——ただし、それらの関係の性質は互いに大きく異なるのだが——という意味で、さしあたって精神医学と哲学の「あいだ」であるといえる。

精神分析と精神医学の関係、および、精神分析と哲学の関係に、ジャック・ラカンはそれぞれ正確な名を与えた。「応用精神分析 *psychanalyse appliquée*」と「反哲学 *antiphilosophie*」である。そこから出発して、精神分析の本質と呼べるものを浮かび上がらせることができるかどうか、チャレンジしてみよう。

そのためには、しかし、フロイトが精神分析と医学および哲学との関係をいかに考えていたのかを、ふりかえっておく必要がある。フロイト自身が医師であったように、精神分析の出自が医学のうちにあることは歴史的に疑う余地がない。だが、フロイトは精神分析を医師の専売特許にすることを望まず、とりわけ一九二〇年代からはそれに明確に異を唱えるようになる。一九二五年、自らが教育分析を行ったテーオドル・ライクが医師免許をもたずに精神分析を施療した廉で訴えられ、ウィーン当局から業務停止を申し渡されると、フロイトは翌年『非医師分析の問題』を出版し、ライク(をはじめとする非医師分析家—そのなかには娘アンナも含まれる)を手堅く弁護するとともに、「私は精神分析の固有の価値と、その医学的応用からの独立とを支持する」と宣言することをためらわなかった(ライクへの処分は二七年に解除される)。ここには、ラカンに四〇年先んじて、医学と精神分析の関係を逆転させる視点がすでに含まれている。フロイトにとって、精神分析の技法を医師が用いることは、すでに精神分析の「(医学的)応用」だったのだ。

もっとも、フロイトの意に反して、英語圏、とりわけ、エイドリアン・ブ

リルを中心とした米国の分析家たちは、非医師分析家の徹底した排除を進めていった。一九三〇年代から八〇年代まで、米国では、ごく僅かな例外を除いて、事実上、医師でなければ分析家になれなかった。晩年のフロイトが、海に向こうのこうした趨勢に業を煮やし続けたことは想像に難くない。だが、米国精神分析のこの選択が正しかったのかどうかは、その後の歴史を俯瞰すれば明らかだ。精神医学のなかに囲い込まれた結果、一時は精神医学の「力動論」化に成功した米国精神分析だったが、早くも六〇年代の後半になると、行動主義心理学とニューロサイエンスに注目しはじめた精神科医たちから背を向けられ、精神医学のなかでみるみる衰退していった。それにとどめを刺したのが一九八〇年の DSM-III だったことは言うまでもない。

ところが、それとは対照的に、もともと精神分析の後発国として出発したフランスでは、まさに米国で精神分析が衰退を迎える一九六〇年代後半に、精神分析の大衆化がはじまる。それを牽引したのは、紛れもなく、六三年に IPA から「破門」されたラカンだった。六四年夏、独自の新組織「パリ・フロイト学派 (EFP)」を旗揚げしたラカンは、その「設立宣言」において組織のグランドデザインを描く。その際に明確に区別されたのが、「純粹精神分析」と「応用精神分析」の二つだった。前者はいわゆる「教育分析」を、後者は「治療論と医学的臨床」(医学的領域での精神分析の利用と検証)を指す。ここにあるのは、「教育分析をむしろ、それによって精神分析の本性が照らし出されるかもしれぬ完璧な形式として考える」という、ラカン「以前には誰も思いつかなかった逆転」(*Écrits*, 231) にほかならない。ラカンにとって、「精神分析とは何か」を教えてくれるのは教育分析であって、医学的意味での治癒をもたらす(より正確には、治癒をもたらすところで終わってしまう)分析ではないのである。ここから、私たちは精神分析について何を知ることができるだろうか。

一方、哲学にたいするフロイトとラカンの関係は、ほとんど正反対であるといってよい。フロイトにはつねに、哲学にたいする警戒感とある種のアレルギーがあった。古きよき科学者として、哲学的・宗教的「世界観」に自らの思考をはっきりと対峙させるとフロイトは、同時に、内省(自我理想による自己観察)の傾向という哲学的素養が自分には決定的に欠けていると繰り返し強調することを忘れなかった。これにたいして、思春期にスピノザに耽溺

したことで知られ、同時代の哲学者と積極的に交流をもつことを怠らなかったラカンは、哲学とのあいだにほとんど親密とも呼べる関係を結んでいた。アリストテレス、デカルト、カント、ヘーゲル、マルクス、ハイデガーらは、ラカンのディスクールの恒常的なパートナーであり、座標軸でさえあった。だが、このラカンのケースが、精神分析の世界では紛れもない例外であることを、私たちはまず心に留めておかななくてはならない。ハイデガーを翻訳した精神分析家など、後にも先にもラカンしかいない。精神分析と哲学の関係をラカンが代表しているとみなすのは、だから誤りだ。

にもかかわらず、哲学をめぐるラカンの発言が精神分析にとって重要なのは、たんに精神分析が哲学から何を受け取れるかだけでなく、反対に、精神分析が哲学に何をもたらしうるか、とりわけその「目を開く効果」(*Séminaire XI*, 247)までもが視界に入っているからだ。この後者の問いにラカンは与えたのが「反哲学」なる呼び名だった。それは哲学を斥けるという意味ではなく、哲学にたいする批判的検討を哲学や他のディスクールの前進に役立てるということだ。そこでは、件の「効果」はもはや狭い意味での哲学の領域に留まらず、ラカンは「大学のディスクール」と呼ぶものの根底に横たわる根源的な「痴愚」(*Autre écrits*, 315)を捉えるだろう。この認識は、「パス」をめぐる学派内でのラカンの孤独な闘争と、六八年五月の怒れる若者たちの叛乱という、絶妙に絡み合った二つの出来事から取り出された帰結のひとつだ。精神分析が哲学的「(我)支配 (Je-cratie)」(*Séminaire XVII*, 71)を撃つこの地点に、私たちも到達することをめざそう。